



○ 経済大国の「豊かさ」と 経済成長のコスト

—— 橋本寿朗「戦後の日本経済」
(1995年7月、岩波新書) ——

著者は東京大学社会科学研究所を経て、現在、法政大学経済学部教授。今春、当研究所で開催した経済研修では「日本経済論」を講義頂き、その明快な論理と伝法肌な話しぶり、印象深いものでした。

本書は、敗戦後の廃墟から奇跡的復興を遂げ経済大国となった我が国経済の成長過程を「日本型企業システムの形成過程」と捉え、自らの個人的経験に照らしつつ述べていますが、食生活や農林水産業にも言及されています。

1949年、埼玉県北東部の稲作地帯に生まれた著者にとって、小学校低学年の頃の最も鮮烈な思い出は食事の貧しさと、農繁期に農事手伝いのための休暇があったことだそうです。高度経済成長期に入ると、井戸水汲みの作業と、土間や竈がなくなり、伝統を脱して便利さを求める「戦後日本社会」が農村部にも訪れました。また、りんごや米の品種改良の努力とその成果の普及に触れ、「持続的な品質改善の努力、競争は日本の工業の特徴の一つと

みられているが、工業に限られたことではない」としています。

また、下宿時代には即席ラーメンをよく食べたそうですが、この時代、即席ラーメンが相対的に安くなり味の改善も著しかったことについて、「多数の企業参入、激しい新製品開発、品質向上、価格競争の展開は、後の電卓や産業ロボットでもみられたような戦後日本経済における企業間競争の特徴の1つ」と分析しています。

さて、現代の日本経済について、著者は、豊かさが実感されていないことを問題視し、ガルブレイスの「豊かな私的消費と貧弱な社会的消費・公共サービスとの矛盾」との言葉を引用し生活関連の社会資本整備の立ち後れを指摘しています。さらに、「日本人は世界中から農林水産品を買いまくって」その豊かな私的消費を実現することにより世界に大きな負担をかけている（エビや木材を例示）とし、「日本人の消費の豊かさを十分に認識した上で、国際関係や社会的消費のあり方を考え直すべき時」と主張します。

なお、各国の企業システムは「それぞれに国内で歴史的に蓄積された諸条件の下で合理性の高い経済システム」であり、「主権国家の歴史を刻印された企業システムが国境を無にする活動を展開」しているのが現在のグローバル化の動きであるとしています。しかしながら、求められるべき「新たな世界システムの姿は見えにくい」としています。

(りえぞん No.6, 2001/10/26)

〔筆者注：橋本先生は本年1月15日、急性大動脈はく離のため、55歳の若さで急逝されました。謹んでご冥福をお祈りします。〕

注. このコラムは、行政部局等と当研究所との間の連携・情報交換の手段として霞が関分室が発行している連絡誌「りえぞん」において、農林水産政策や経済学を考えるヒントとなりそうな書籍や論文の内容を「ほんのわり」だけ紹介することを目的として連載しているものです。

○ 江戸時代の飢饉とグローバル経済下における農業・食料問題

—— 菊池勇夫著「飢饉」

(2000年7月, 集英社新書) ——

本書は、日本近世史・北方史が専門の歴史学者が、我が国における飢饉の歴史を問い直すという作業を通じ、その発生メカニズムを分析するとともに、飢饉回避のための社会システムのあり方等を論じたものです。

著者によると、最初の文献記録である「日本書紀」以来、数年に一度、あるいは毎年のように日本列島のどこかで飢饉が発生していたそうです。鎌倉・室町時代においても冷害や干害、虫害や洪水に起因する大規模な被害がありました。しかしながら、江戸時代に入り飢饉は大規模化し、何10万人もの犠牲者を出すようになります。その背景・要因として、市場主義経済の浸透があるとしています。すなわち、地方農村のすみずみまで商品貨幣経済が浸透し、全国的な市場経済に組み込まれた結果、領内の米が商人に根こそぎ買い集められてしまうような事態が生じ、このため、わずか1年の凶作によって多くの餓死者が発生するようになったというのです。また、江戸で消費される大豆など商品作物の生産が東北でも盛んとなり、山地を開墾し焼き畑で行われた結果、猪の食害が深刻になり飢饉につながったという記録も紹介されています。

また、市場経済下では商品は生産地から消費地に流れるため、飢饉の被害は生産地（農村地域）に集中することとなり、餓死や疫病の蔓延のほか、身売り、間引き、更には人肉食といった惨状が見られました。一方、「農業は政の本なり」とする老中・松平定信による備荒貯蓄対策などの取組も紹介されていますが、著者によれば、飢饉の歴史は「人間と自然の関係、あるいは人間と人間の関係が生み出したひずみの歴史、人災史」であり、その要因は、「社会・国家の危機管理システムが自然災害にうまく対応できなかった」ためであるとしています。

しかしながら、本書の内容は、単なる歴史上の出来事の紹介だけではありません。著者

は「果たして、飢饉は過去の出来事となってしまったのであろうか」と問いかけます。現在の我が国の食料自給率の低さ、外国、特に特定国への食料依存の危うさを指摘し、「日本列島全体が都市国家化ないし商工国家化し、一方的な食料消費社会にこのまま突き進んでいってよいものだろうか。」と疑問を呈します。

さらに、著者の視点は我が国だけの食料安全保障に留まらず、経済のグローバル化が進行し食料が国境を越えて動いている現代、江戸時代の日本列島に起こっていたこと（農村部へのしわ寄せ）が、世界的規模で起こりかねないと指摘しています。食料輸出国が凶作となったとき、「その国の農民や都市下層民が絶望的な食料不足に襲われる危険」を危惧しています。

そして、「豊かな我が国が大量に食料を輸入していることが、世界のどこかで飢餓を作り出している恐れがあるのではないか。このことに無頓着で、独りよがりな安閑としていてよいものだろうか。そのような想像力を働かせていくことが国際化時代の最低限の知的営みであり、特に政治家や経済人の責任・モラルが問われるべきではないか」と、読者に訴えています。

(りえぞん No.7, 2001/11/16)

○ 人類への警鐘

—— 中村靖彦「狂牛病」

(2001年11月, 岩波新書) ——

今年3月、実際に英仏に渡って取材し、関係者への綿密なインタビュー等を通じ、英仏両国政府の対応が後手に回りBSE被害が拡大した状況について執筆を進めていたところ、思いがけず国内でも感染牛が確認されたのを受け、関連する記述を追加して「緊急出版」されたもののようです。

著述内容は、風評をあおらないよう事実関係を正確にすることに意が尽くされているようです。国内の行政の対応に不手際が指摘された原因として、欧州での被害拡大の状況に学びマニュアルを準備していなかったことを、昨年春の口蹄疫と対比しつつ指摘しています。また、今後の対応として、牛の素性を明らかにする「パスポート作り」の必要性が述べられ、さらに長期的には、粗飼料多給型畜産と、地域の伝統的食材を重視した食文化形成の重要性が強調されています。

去る11月15日、明治大学で開催された食の安全性に関するシンポジウムには著者も講師の1人として登場し、会場の消費者や外食産業関係者からの「国産牛は不安」と言った質問に対しては、「現在流通している牛肉は安全性が確保されており不安はない。私自身、牛肉は大好きで消費量は全然落ちていない」と強く発言されていたのが印象的でした。

(りえぞん No.8, 2001/11/22)

○ 「試行錯誤し考える農民」への期待

—— 大泉一貫「ニッポンのコメ」
(2001年7月、朝日選書) ——

著者は宮城県出身、東北大学農学部助教授などを経て2001年から県立宮城大学大学院教授。農業経営者を対象とした「一貫塾」を主宰するなど、現場主義の実践家としてもよく知られているところです。

さて、本書は、米に対する日本人(著者)の思いから書き起こされています。それは、主食はずっと昔から米であったというイメージがあり、田植え時期や実りの秋の田んぼの情景は日本の原風景のように懐かしく思われる一方で、コメの生産や流通の仕組みは「社会の常識では理解しがたい複雑な仕組みとなってしまった」との嘆きです。

本書では、旧食糧法から新食糧法へ移行す

る中でその「複雑な仕組み」がどのように変遷してきたかについて詳細に分析されています。そして現在、食糧法の下、著者の言う「食糧法遺制」に寄りかかろうとする人々の考え方と、「消費社会の商品になり果てたコメ」という日本社会の二つの考え方のギャップが「再生産」されていると指摘しています。また、現地調査事例に即し、「現在の生産調整の行政コストはあまりに高すぎる」としています。

しかしながら著者自身も認めているように、これらの隘路から脱却する方策については抽象的なものしか示されていません。当面、「市場経済化による業界の再編と、食の安全性や食材への関心の強化という倫理観を持った主体がイニシアティブを確立すべき」とし、また、その主体については、「官僚と業界が一体となって推進する国家統制型」ではなく、「市場に向き合い、お客の要望に真摯に応えようとする仕組み作りが必要」としています(この思いを込め、あえて標題はカタカナにしたとのことです)。

その一方で、戦後日本の「無価値社会、信念のない進歩主義が日本の農業を壊滅的にした」ことを批判し、「新たな農業や農村社会の構築には、高度経済成長を支えた価値観とは異なった価値観が必要」としていますが、これについても、「これに気づいた人々の間で作る関係のなかで、新たな規範と倫理を育てていくしかないだろう」との表現に留まっています。

さらに、担い手に関しては、食糧法によるコメ市場経済化によって「試行錯誤し、考える経営者」が登場し、構造改革の担い手として期待され始めている点に注目しています。著者は、これら経営について「いきなりの自立は難しくても、試行錯誤しつつ、その結果を自らのものとして背負うことはできるはず」とします。そして、消費者と直接交流しブランドを確立している「試行錯誤する経営者」の実例を紹介するとともに、「我が国のコメシステムは、彼らの試行錯誤を支援できるようなものにそろそろ作り替える必要がある」というのが、本書の結論となっています。

(りえぞん No.9, 2001/12/6)

○ 食べることの楽しみ、 食べられることの喜び

—— 正岡子規「仰臥漫録」
(1927年7月、岩波文庫) ほか ——

台東区根岸。山手線・鶯谷駅前の繁華街の喧騒を抜けた所に、正岡子規が早すぎる晩年を過ごした「子規庵」がほぼ当時の姿のまま残されています。

子規は、明治16(1883)年、16歳の時に上京して東京大学予備門に入学するも間もなく中退、俳句・短歌革新運動に没頭するようになります。しかし、何度か咯血し、更にはカリエスに侵され、ついには寝た切りの生活を強いられるようになります。この子規庵の「病床六尺」とそこから眺める庭の景色が、彼の世界の全てとなりました。

病床において子規は、多くの優れた随筆・日記文学を残します。その一つである「仰臥漫録」は他人に見せることを想定していない私的な日誌です。このため、より直接的に子規自身の思いが述べられ、また「写真派」の子規らしく、その記録は詳細で、かつ、悲惨なものです。

子規の病は次第に重篤となり、やがて自分では寝返りさえ打てなくなります。背中や腰の穴から膿が流れ出し、激痛に耐えられない時はひたすら「絶叫、号泣」するより他ない生活となります。母の八重と妹の律がつきっ切りで看病しますが、皆が留守にした一瞬、子規は苦しさの余り身近にあった小刀ときりを手に取ろうとさえします。

このような苦しみのなか、子規に残された唯一の楽しみは「うまい物を食ふ」ことでした。「仰臥漫録」には、日々の食事のメニューが丹念に記録されています。例えば、明治34年9月24日の献立は以下のようなものでした。

[朝] ご飯3碗、佃煮、奈良漬、牛乳ココア入り、餅菓子、塩せんべい
[昼] 粥3碗、かじきの刺身、芋、奈良漬
[間食] 餅菓子、牛乳ココア入り、ぼたもち、菓子パン、塩せんべい

[夕] 粥3碗、生鮭照焼、ふし豆、奈良漬、ぶどう

ほぼ毎日、このような食事が続きます。寝た切りの病人にしては大変な健たん家と言えるでしょう。壮大な子規の胃袋は、彼の残りわずかな生への強い執着を1人で背負うかのようです。司馬遼太郎は「坂の上の雲」のなかで、子規に「あしはもはやこの病から抜け出そうとは思わんとらんぞな。ただ、死ぬまで書き物をする体力が欲しいのじゃ」と言わせています。

また、高浜虚子ら弟子に対しても、子規は「御馳走を喰ふが第一」と勧めています。「富も名誉も一国の元気も、みな御馳走の中から湧き出る」ものであるから「座っていて頭脳を使う人は少量の食物から多量の滋養物を取るべし」とし、特に牛肉を始めとする肉類を推賞しています。

さて、その子規も明治35年に入ると胃腸が弱り、飲食の楽しみも奪われたと嘆くようになります。そして9月19日未明、月があくまで明るい夜、数え35歳で永眠します。遺骸は、当時滝野川村と呼ばれた田端の大竜寺に葬られました。

その大竜寺を訪れたのは、12月のある冬晴れの昼下がりでした。目新しい本堂の脇を抜けた墓地の片隅、簡素な墓石には「子規居士之墓」とのみ記されています。右脇にはそれを見守るように母・八重の墓石が、左脇には子規自身が生前に残した文章による墓誌銘が建てられています。日差しは暖かいものの、北風に背後の笹が騒がしく鳴る日でした。

(りえぞん No.10, 2001/12/26)

○ 市場主義者の主張は マントラ（呪文）のたぐい

—— 佐和隆光「市場主義の終焉」
(2000 年 10 月, 岩波新書) ——

景気低迷が長期化する中、日本経済の「不治の病」を癒すには経済構造改革が必要であるということで喧伝されているのが日本経済の市場主義改革です。即ち、日本型制度・慣行を「アメリカ型」に作り替え優勝劣敗の市場競争を行わせることが日本経済を甦らせる唯一の方策であるというものです。

著者は、これら「絶対市場主義者」の主張を、「科学的な論証なり実証なりを一切経ていない」という意味で、マントラ（呪文）のたぐい」と断じています。例えば、「累進所得税制は勤労意欲を減退させる」との命題については、累進度が相対的に高い日本の勤労者は、それが低い米国の勤労者と比較して勤労意欲が乏しいことを統計的に実証する必要があるが、それは不可能だろうとしています。

また、市場主義という思想は目新しいものではなく、19 世紀の英国において隆盛を誇ったものの、1920 年代の世界的大恐慌の中、政府の市場介入を必要とするケインズによって否定された（「自由放任の終焉」）ものであったのが、1970 年代に入り、オイルショック後の財政赤字の拡大、社会主義への幻滅といった事情を背景に、サッチャー政権・レーガン政権（我が国では中曽根政権）下で「復古」したものであることを指摘しています。

そして現在、市場経済化の動きは、グローバルな規模で更に進められつつありますが、著者によると、グローバルな「市場の失敗」は国内の「市場の失敗」よりも深刻であるとし、その理由として、「ルール違反を監視し処罰する WTO はあっても、国家間の初期条件の格差を是正するための措置を講じる『政府』に当たるものが存在しない」ことをあげています。また、WTO のルールは資本主義の「均質化」を求めるものですが、多様な資本主義が共存するためには「資本主義多元主義とでもいうべき思想」の確立と「公正の公準」を明確化すべきであるとし、さらに、地球環

境問題への対応等も視野に入れつつ、「グローバル資本主義のガバナンスをつかさどる国際機関の創設」の必要性を指摘しています。

ただし、ここで留意しなければならないのは、著者は市場主義改革の必要性そのものを否定しているわけではないことです。それどころか、「日本の市場経済が不自由、不透明、不公正であることは、もとよりいうまでもあるまい」とし、それを自由、透明、公正なものにつくりかえる「市場主義改革の断行は何にも増して優先されなければならない」と強調しているのです。

その上で、市場主義改革を遂行し効率性を確保しつつ、公共性を重んじる公正な社会の実現を同時に目指すべき（市場主義と反市場主義を止揚する「第 3 の道」の追求）と言うのが、著者の主張です。

なお、大学を念頭に置いたものですが、社会科学研究者の存在意義についても言及があり、それは「政治や経済の現状への警鐘を専門的立場から打ち鳴らすことであって政府の政策を正当化することではない。その意味で、社会科学者は総じて現状批判的にならざるを得ない」としています。

(りえぞん No.11, 2002/1/23)

○ 経済学は何とつまらない学問であろうか

—— 飯田経夫著「経済学の終わり」
(1997 年 11 月, PHP 新書) ——

本書執筆中、友人にこのようなタイトルをつけるつもりだと話したところ、友人からは即座に、「それこそ（飯田経夫という）『経済学者の終わり』だ」と反対されたというエピソードが「あとがき」のなかで紹介されています。

我が国近代経済学界の重鎮の 1 人である著者は、この「鬼面人を驚かす」ような標題に何を託したのでしょうか。

著者は、近年、経済学者の多くが展開して

いる市場メカニズム重視の「改革論」が全く気に入らないようです。確かに市場経済はかけがえのない優れた仕組みですが決して完璧なシステムではなく、その欠陥を是正するのが経済学の役割であると言うのです。経済学は社会哲学（「よき社会」とはどのようなものかを考えること）でなければならないというのが著者の持論です。

しかるに、現在の多くの経済学者は『バカのひとつ覚え』のように『規制緩和』という名の『改革』の必要性を絶叫し続けて」とし、端的な例として「民営化論」を俎上に載せます。著者はこれを、ほとんど全ての事業はカネ儲けの対象となることが前提の議論であるとし、全てをカネの話に還元してはばからない「拝金主義」であると軽蔑しています。その一方で、著者はバブル期以降の日本社会及び日本人にも失望と怒りを覚えているようで、「日本人の倫理感のみじめなまでの衰退」と「日本の諸組織における規律の恐るべき弛緩」を是正するためには、むしろ「規制の強化」こそが必要不可欠としています。

著者は、「この世には、およそカネ儲けの

対象とならない、カネに換えられない重要な価値というものがある」と主張し（それを否定するのは「人間性に対する許しがたい冒とく」であると断じています）、その例示として都市のアメニティや美観、地球環境等を掲げています。そして、これらの価値を保持していくには「市場メカニズムに委ねることは論外」で「高度の計画性と素晴らしい知恵が必要」とあり、この観点から政府の役割にも言及されています。

さらに、たくましい日本経済を支えてきた基盤には「システムとしての日本」（長年にわたる日本人の伝統・慣習・体験・智恵が結実したもの）があり、「一時の血気にはやって破壊してはならない」と強く訴えます。

いずれにせよ、現代の経済学（者）に対し著者は「どこか歯車が決定的に食い違っているのではないかと結論づけており、それは「ある種のペシミズムだと言わざるを得ない」というのが偽らざる心情のようです。

（りえぞん No.12, 2002/2/6）